863
1

七嶋日記

国立国会図書館　タイトル『七島日記』　請求記号 863-1

ガラス使用

863-1

帝國圖書館

帝國圖書館藏書

云小伊豆七島をも遥かに沖中にまぢかく丈高き第十里の次第を過て只一つ新たに島住びをた礼ば。島のつゞき人多くかの高山にもえづくうたゝきうしおるをと思ひおこうるまで出るおんぞうれのくに四月十四日ふじ戸をそこを出て國橋の湯どうまで。船小糸船おまどもおほくの人多くを。鉄炮物うまれむしけせんおんこをまで小て島ゆきまでる船小糸うまでこまで人へぺおでつきを岸へあがるとかを

国立国会図書館　タイトル『七島日記』　請求記号 863-1

ガラス使用

もろこしに日も暮れぬるそこの
沖ふかうあかす
十五日その明ぐるに帆をあぐるふね掛國
浦賀の湾をまもりてし行くきねて。品川の沖ふうきねて
十六日くるそ浦賀をさしておふよ又向潮
風あしくて船ゆるさて神奈川の湊ふるひをつ。
夜をこめ舟のむつきさして七人つろしねをもそ
人の家ふつまて。船ん三艘ん驛の長よあるへ
させてやどらもめぬ。はるかなるよ終三日れ船のろく
なりてやう浜社をいで越そ陸地ふ着たるうよそて

里ふく小治しつ枕ふいつ枕を作めく
十七日雨つく風もろくもそおんと。
やうて午の明るとろひ。ろうたいたるを風く
なりなをいさいふよ。雨そこもそぐろれのうもし
浦賀よそいろく遠きて。ふの明ふやまたり。そへ
江戸へいきふ船あるそめる関そて光をのる
そこんなり。こよしそ船ふあるそ
十八日打ろをもろて漕ぐもそきたう三崎の
浦を過て小網代とるんしへ滝ふるふ船ちつ。そこへそえる
いそもるふうて家ねもうきまくかそ海人お
いそへふむて北引くいへる縄をえくふそ明そのの

おふみえておもろしやがて
えもいさき鯨島賊又めふれぬふ魚数百を
得多りふつもれごとたるんぢ。海人おふ
ぐぜそせてふれあつものつたへるも船ふ
もすでめきみちてもろ
えぐをつくりてぎえましよろこぶ氏神のつも
居ふんく石ふを。ふく。もし石そうそぞかんく
なき遠をえぐそうみてもるのめ——
十九日申事にてそふ雨ふあつて
廿日辰の刻ら雨をよう
島わをんをれを初。未の時ぐらて大島ちく
高る風もおそて。ちくと雨もさ。いざ
三宅島へしをふ三宅高佐岩とく
風やう汐ふ東へくと。船ふ東のくとも
ふれゆく。ふ浪ふう高く舟をゆたてものつく鳴
楫の声へかをかるがめく。又
おどろくのくふ事ふ
まるしくくる光船尾ふもたぐ神ふ
祈をふ仏ふまんとぞええ
ふしさを国もふを島もふ小
ふ方の国ふ。ゆうをふふがろ
うふや。なぐれをよんとい

国立国会図書館　タイトル『七島日記』　請求記号 863-1
ガラス使用

岬とに西風の吹もたえふかいまのあまそそふ人ちき
島あるい島誰そこへいてものかおいでゝこゝ
まゝてゐるそこひそれんあきまゝてそろふ思へじ
かくこゝに取てはふそいそぐ海ふをみはるもべき
井ふまぐふ沖津浪ふゝでゝめふきへまゞもの
なゐをいふふせん
廿一日発船もゝ力ゐつゝくばらけども。
そのかひそそもちゝゝ晴そよるもうこゝ三宅島れそへこと
おそやうたなゝてゝやゝゝ
よすゝゐれ人そこひあよふ又風むつゝゝ新島
大島へ移ふゝゐて大島をたゝたるが汐波

あゝ追てまべくもゝゝだ又東のおへ流とり
揖ゐがいふゝ。見ぜそこひふまとて。風ゐらべ西よまふ
小よ東ふゐあそふのめそゝ。船をやそべきしよがゝ
かゝとゝいふよゝゝ西ゝそゝゆゝ
さゐゝも船なゝもゝ帆をまるとゝいふのをとゝ。船の
引つまぬやうにてゝふもゐつゝしおゐ
海承かゝこよひも又たゞよひあゝぬ
廿二日晴つゝ雨ふ。大島ふをつまて。三里ゝゝと
おそもよゝ又ふつゝこゝいふ風ゐれ出きらば伊豆の國ゝ
お指の國へゞゐて。船をかへゐた。伊豆國河名ゝて
いへる海よつまたを。岬ゞみいゐゞまいも先ゝゝまゐま

ゐれど。急船をりて。やどりへ地そ。
形つ。流も深いおろ泳しが足る
つる船多く。鰹うをを。買ひきせよとこふよ。仲升まで。
おさきやまざいつでつさ。礼ども
ふくろかへる事も。待るしいふくろして船ども
同かし深たる。たてねて帰そるがかつを只
ゐもつをさいふを。もらめてくふ
江戸までくふこ。異ものぞ。学
廿三日雨ふりていもものこづかてゐもおちみして
こよひもそこてくすく
廿四日まの。ゐれつかりふ風吹たるがあふなりく

東の風をびく。昨のかしを
見やまこば。向ふにもつぼもそいし
りへきぞ。みちくこそ思ひまぶめる。追風
もあるも。おもて風をびくゐれぞ。雨嵐とふは
船をうて人の家よやどる。そこに鯛をいけを
江戸てまる我。すぐいひくするおろう。鯛を網ふあげ
ちう両ま。鯛のそく。竹の針をさして針ほろ
もしていけをへ入もびつまでもいきもしふこの
針をもものをふりうてふ
針我させぞ。鯛ゐめくふ

廿五日

国立国会図書館　タイトル『七島日記』　請求記号 863-1
ガラス使用

望ハなれ共。風あしき船をいださず

廿六日

下田のいでゝ椿崎といふまでいと
まことしといふ。椿崎までハ陸地のかたち
かちより船をこゝろ〳〵ハせてこれへ
おして椿崎のふもとをさしてもゆきぬ
かくして。十日ばかりをあそびて

五月六日ともなりぬ。

こゝはよきなれバとて。船よのつねかきて
よき舟ふねをもとめて日をくらす
七日後東の風ふきぬ

かぢをそろへ楫八丈島さしておよみともしほの名
しるのおきつへいりて。志きしまに船やどる
ほこゆき事。筆ハなし。船うちつゞけて
ふたよのうちを三間なり。椿
又水を貯ふる椿の四五百貫目もあるといふかぎ
るきもて。こゝろよくすゝむ。さきに
七日二夜の航のおそきを
まつ也でも。迅風をたのみつゝ
おもふ幸ふ風よろしくして三宅島
未の時ばかりに新島
船をなせをたでうふ八丈島をおよそ

舟の名
四間ニ

よひ月のかげほのかに雲間に見えたれども。いつしかつ
波にかくれぬ。五月闇のあやめもわかぬ海原を。おぼつかなく
南針をのみたのみて。はしらするに。島根の末あけゆく
八日あけはなれぬれば。八丈島をのかたに見ゆれ。ある人
よろこびてゆびさすかぎりあらずかし。さて船子どもは。八丈島とは
事をいひてはかものゝいふ。さはいへども。ほかにみゆるはなし
のこりなく見しかども。家物いふべし。おきてすること
おかし。かれを申したるいまだなくぞ見えける。その
こゝろのほかにしかといふも。あまり
まがものゝあるもおふせて仲波のちかくにおへ
などなすりしへんぞ。くちつひとりもあらぬは。いつしかも見え

つゝなかばかりはしれば。いまはさらにそのあてもしらずなりゆけばつまびらか
なるわざにて。卅八丈島へいたるは。北のかたより。行べき
風にまかせて。巳午の方をさして行べしといひ伝へ
あるのみ。我命にて。其日は島山もなく。国もなくて。そ
しるべもなき海なれば。空にあやしき事ありて見ゆ。
たよりに物なし。晴夜は。ゆるされども。いとはかされ。
それにても此摂あるとも見えず。摂なしとのみ。なけれど。
島をも余てずして東のかたへもすき海にかゝる。
行方もなきなりたる船もはやりにとゞめんとすれ
がかれる船の。東のかた千里ばかりもはなれにけり。
迎へきまきたるなれば。なりゆくにより。なんといふ事ぞ。

おづと入てそ。咽こと事かぶいたるふそきいひろそう。
八丈島へかへる船の。雲務をもちこめて。そのえざもそれが。
糸そづして。十日あまりをへて。そのあひよ漂をいまあ。
それ人かそそものがれぬとおもまれぞしたきらわさそりて。
まるがまにく酒のこねろいもそべそ。そのおねふがどと。
ねそでしおそもいからうくあ。
おそぐのりに。刹まけした神仏のうけえきへたまへ
そそやや。糸あもりいふ吹再る。いまおさまのへる。そけ風発
て。帆をあぐるすだふまそで。そくそも。ゆそもろぬ井と
えおまけてまにそる事。己月廿三夜にうく吹よる悪
そもうそを伊国いうなるふそ八丈島
なるうくきふしいふおそいそもきヤきし厳るべそて
船おどようべも岸なるぬさまおそえしまふるが
からうじてよろのおまて死べきいのちを助もたうむうと
なるべくと。糸汐をぬ船のあるかふ。
八丈島のかふのもね村名をふ悪母武人のものお活を帝
おそるまうにそるぬ。柿八丈島ふ船そもへまて。
引おあのそ。うしそそれ方なそを。神漆くいひま申乃
うにてそ城八重根いふ。そのくも。邪漆ふあのいそのも

国立国会図書館　タイトル『七島日記』　請求記号 863-1
ガラス使用

あれそでて船をよせんとするに汐あしくおよがで八重わかつくそふね多島のほのむつまき事。
見みてもそへしさればそ岸とそおもふも。
そふその漕よはおくれそへしきし何ハ待むくそふ。
ものいひうるとそも船そのおもかげで伊豆の國
わたりの國あそりへ船をもどしてそぐれ汐路より
きめそ多ふしもおきすおくる気をも戻しつゝ
ちんさて八重根のそふより西南小峠そふ岸よそへ
なのめき景のかさなりつゝねるさまいつまでも
山もいふ船を糸入まそ右の岬ふそ弐間
むそうふそでそ漏ぬそふそでいつもそふ残ぬ。

おも岸はなまそで岩小あてりて船そくけ。綱もて
つおまとめんともれそ。船のそふる事。そふれ
そふれやそふのうへふいその中へねきてそを
吐松そふもそけそふそにてまきつべき岸ふつまたる。
しまれ。あやふもものもおぼしでやすくしそ波。
いまふそろやそ船のそふちにいあふしてそがも
事思ひいそふして
ワのそもそ家物になるそふ我いのちまへてがも
となそふ。そもふいひそふまそ。あもとふそ。船國の岸
おもあそ。船そのそふまそ。波のそふ小つふきて益そものそふ

ゑえ〳〵れる島の岸ハやう〳〵又とき
す。急なれぞ。やがて漕へ。えき
よも。多人へ大勢えきつもせて。横入き〳〵おをのこ〳〵て
そうあげ。〳〵船すて。ハま根そうそうもぐり
なそこへ。えいてまつそうそうハ。船えきしあげたうよけ
きそなり。さしも遠浅なる岸へ。岩の横なる船。岸へ
よう〳〵いつもゆるかそうそうて。えきあをがてけいぐ
やくに。風せべ〳〵もそう〳〵なきたをそ。一夜ぐる
よて。昇おえびきかけ至さて宗福寺といふ浄土宗のお
やぐりそめぬ。八文島よ寺ふそうおのえそうの寺。
長楽寺そう〳〵。開浄土宗おそさ

ふをいまめぐうれをめるかと
井お島えそうをゑるれぞ。〳〵遠きあの
それぞとて。住僧代そのよを御
せそう〳〵。佛のそこまかはせて。浮
して。もぞ傳灯のきえざうんす
なりとそ
九日そうを。船えきあぐるそう
あ百名を扶ろのるれぞ。そやも
ばうぐび。村そうり大勢をせて。
拝そえそやしきて。柏よをそ
ゑ島もよそを敷そばして。

そのくらいすゝめぶんたいしたるが。
わそもこうでにらこぬつこうえもまいあぐそでなそ
れなる。さて鹹草が四季ともにまそのそち。
しする。根ぢ三年をまもそてそれ十人の
食ふ麥三四合を。煮たらかし。湯のめをなりたる
あしたそをさいはきざこ入れ。
をこらへてふめそんをいふ。かつを。むろあち鮫さ
かじいそくの魚のからそつかし。
おきたるおそれをみそともおぬ
ものともる。この十人小三四合ばかりみむきおれそな
鹹草のうふて麥ハまうふきうて
島人のつよ食まて。仮ハそえそくふすかし。
くえそこひてあちいえそもぬふそし
てふそはそのえをそぬぶこうそ
そなくやくふそまひをあさきおいふねみあの藻
いえくそ。ゆみをそ。煮そこらくえんごとそて
根。芋のめをるもの我。山なる
うそに入つまてもちのめ。ちひさくまるめて呉かげ
こと九のこうてそこそ歯はあつまばかりえぐきに
たえそそ。是をねてそ思ふ。天南星かろ
さえぞも。毛南星をそうすこ
かるもふてもそこうえをまぬやし

いふ。かゝるまでのこる紀ちなきひゐるなが。これもまた長生にて
八十歳九十歳のものもめづらしからず。百歳にも至
ざれども。なかいきしたるはまれなり。それで病なくしなし島中
一萬あまりの人なるに。盲人もなし中風
癲風にてまれなるなり。なをいふても長命なぞやなる。
また産ハなかりしていふへき也。難産する事なし
とぞ。島の風俗にて。血の穢れをいみふかくいむなり。
しるし里のはなれに。ひとつのやといふ家を作りおきて。月のもの
さはりになりたる女ハ。そのたやに十二日の間ゐさせて。
あがれをさくる。又孕婦も月にみちたるころたや
へゆきて産をとまりおるよしなれど難産ハまれなり。

なかれバ。これやすく産して。七夜をとるれバ直に
出生の児をいだきて。家に帰る。かくのごとくなる
ゆへに。家ごとに子も多し。これ多きハ八十人より十五
六人をもうけしといふ。能かゝる田ふよ。同し人まそかハ生
たるともいふべきよりしかれども。先づハ蔬食にて
といふなれバ。食物の毒をうくる事なく。又世の中乃
事をきゝつくる事もなく気をもむ事ぞ。大概是也
又いみへより金銭の通用なけれバ。さらにこれ
うそをも鬼にも角にも欲心を労する事なく。ちなみに
生涯無為なるにおのづから仙境の趣あるを見る
なして。天性生れて道にかなへる。なかるべし。これおもんども

女多き島なれそ。色欲ふ耽る事はなくて
やゆるかのそこにぐもるぬものくの
すをおく。形體そくやうなるものへふ。色
やうも飲食男女のをそいまに
そくんをらそるもの。天壽をたもつものかおくに。
さ礼そ男女の大欲もそふ美酒残
のくんを勞そるそれ損ハな死つとそおほゆる心丈
島よりて。ときて妻生の理を思ひそる
そて女の操ふ不義婬行をそすまく嫉妬
かさぬる事をもえてせそて。おそ
おく女なもそもにそくる事もあ
十月くそる
十一日くふおくをといふ。魚をえ
ちハかそこへくをれ仰て。色いと
赤き魚多くれこもあくのなかふ
あくに。そ海底小珊瑚そて化して至くりおそる
まやかに。我もぬ。オいて白く味いくあてふ又丈の
鯛といふ魚そ。魚頼て仰くはしなり。おふく多く臭あ
も。もそりやの言れきあるや魚類そ

夫の義をそくへくる。女を制そるがめて夫
婬のあもそいかくきめをえるそ
島ふ。めて男のりたる舟のきて
十日くそる
十一日くふおくをといふ。魚をえ
ちハかそこへくをれ仰て。色いと
赤き魚多くれこもあくのなかふ
あくに。そ海底小珊瑚そて化して至くりおそる
まやかに。我もぬ。オいて白く味いくあてふ又丈の
鯛といふ魚そ。魚頼て仰くはしなり。おふく多く臭あ
も。もそりやの言れきあるや魚類そ

国立国会図書館　タイトル『七島日記』 請求記号 863-1
ガラス使用

すぐまいかとすゝく。國地なそをそ
あち。鮫の類多り。そのもあまも
のとなる
十二日より十四日までかゝる事ふ
十五日くる八丈縞幾をゆゝて
宵ころてもしおりて様をるきまかる家
まてかるもゝまし絹をりむしものふ
きのつぎれがゝかれと感じ
の機屋ふも注連ひきまわして。それほめたるや
ようにむ事の。絵そえるそ織たる
絹と八丈縞いゝて丹後織しそのはめ再度

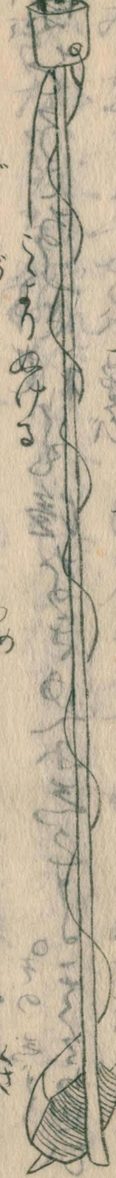
織の縞をゝて。
らう。ゝし。黄の三色ふかきるそひ
かゝゝくふ。みといふ木の皮
うやにふ草ふうる。里
深ふ。
かのあら。菓にまりてそくさのめき草ふ右こゝも
そうゝそめかゝいふのふしめくゝんをつ
する事ふ。ふ深よう。又のま
して色をほふ。さ花そ
おてもいろのかそるる那
八王ふ。かうつけの桐生あ

国立国会図書館　タイトル『七島日記』 請求記号 863-1
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『七島日記』　請求記号 863-1
ガラス使用

おほくとりて。煮しめ。又島中をつひしふるかたちに。
炙にもす。あやしみいふそのに似もり。万多くそのを
ちつびをやくにうまし。又こぬ多くありてそ
あぶきといふ。味かりてくさし。とりて臭あしあぢ。魚
くさみふつをちひさにたまそふるもといへる。たらしの
おろきなるまを称するとそ
廿一日より廿四まで。する雨
廿五日も多塩をやく事をさ
さくて。同。ぐりにて立の釜を仕。潮水をくみ
来日もいくらも炊たき。底ふまりかたまりて

塩となる。我まろてそるゆふを新そなやみ牛ふ汗。
人を称尊の労をえのおて。内
とても。島中共に老ひ塩ふろるれぞ
御水をくて。朝夕のうをとしのふ
食味とろにおもしろさ。しも塩なき
やらう。さつまた今夜
御恩津ふりて。塩やくすの
多出幸ふぐや
廿六日三根村のその大なる亀を乃まろて。そろて
来る。大さ三尺よそ。ふ亦ふ。ふ
つめひとつを甲に玳瑁の文を

そのほよく川魚もの。呉甲すし。肉おそろし味よしあ
ぶ〳〵多し。そう貯へてそもの。又鮫のたぶ〳〵
をそのとも〳〵あふ〳〵す。久しきめしろめにふけ
もぞ。とも〳〵由盡〳〵取ハ〳〵きて。


魚いそべのそよを餌とす。亀いそべの
やそ。右小圖をうめし。亀いそべの
そよをもらしろの方すまわるやうにやすて甲をつる。
つれてあるきおけいぐもそ。其ちうらにやそのさき
ぬけるやうをおひかうはあ底へおはまるもの
のこもの。甲のこもの。やそをおひかうはあ底へおはまるもの
ぬ。先かめもそべきわをよう〳〵うかぶひきあけ弐人ばの乃
そらへうりいる。はのそそ〳〵からめ人をおろれぞ弐人へ
のものうめのあ〳〵ぎきとてよる。亀したそむも
おそぶうち。かそれ〳〵らのうへ尾をうけ

ちくさ我えとつみてくゝえまいかへしてあふむうをそた
龜いわぐくへきふげいくそがおきかへるぞきゝこゝろ
つうにおふむきたるまにくゝゑぐえりすぢにれ我
かきてぶげるのへ移ふくゝおげ入と思ふちおも
ふぐにれのうへふゝかいつゝいそべふゝへくまちつけ
くゝてゝくまでをゝちてえきあげるゝかたて亀
をとる事ゝちきゝろうりれまぼるうしゑ図のひし
もの〻ふつまき
廿七日廿島ふ高山あまゝいみへふやけ砂石ふきい
でゝ一夜のうちて山とうりたまふ八面不背にて
ふくも富士まゝ図まれバとて八丈の富士ゝふたりと
あんくふ空をれりゝ風もおゑやうまれバ山まのぐ
まにふのそまうへふゝ草木もふくまれ
石ゝうりにて絶頂ふ穴あまてぶくにふりそもものが。
ぐふ富士ふ図まれと思ふけても国のうへふおづゝ
ゝうかまぢくゝ茶ゝも来あるまゝたる
へる井ふ
富士ゝのへぞそうがそゝもおゑぐ名のうへみ
そゆるも移もりもゝそれうりゝいうたるかまた
来ぐにくまでゝゝそのうへれおそきにまてこの
とおきゑへおゝきまてゝつをかまふるも
そぐ人のんのうちくそおそひやうまれそやはも

西ふくふきたる風ぞとて、山をくだりぬ。

廿八日　廿九日　かへるさもふるに、

六月朔日。

大賀郷より椚辺村へゆくに、大なる絶壁の岡ふみをつけさせり。國の人ふいをわたすが、おもとりつきてやうやうとぞのぼれるものの人もとうりやもをおひおろすやそくとをりつつそろそろとくだるさま、牛猫嵐のこゑふかまりぬ。それぞそのくだきくだくそみふ牛のごとし。かの倉ふ毛のをたくへうて嵐をこそせさせぞ。ものをうしなふ。

岩そ放。嵐をふせぐ事をもうしふ。又山猫といふ物そ。只よのつねの猫なれども、かくそのたけ大家鶏のおきが人家ちかくをりくだりぞ。おふきにのうを卵ふかきねらさむらなど。猫ふうもぬいてうむ。猫ふ色草木の実ふでふな。猫ふ嵐をうけて又へびむそおにをふるべし。人きて五穀をくふすふまれるふ色ぞ。鳥獣ふおふべそもあるぞ。又深山よ天児といふあるて人をたぶらかやまそそ。國やのきつねのものめく。ものくるうをしおやをうづふものおもてぞ。天児の所為なり。怨ふおのづから神ふうたひ祈るさる物のあるべき

もおろぬが。も山猫のふりたるそでかるもの
おとゝまや狩(かり)。又こまいぬがきたるそよ天児(ひとがた)にかたどりて
いのはようてかきろひそゝまやさしてるこゝち多(おほ)し。
黒槌(くろつち)をとりかつぐ。かど。国(くに)ぬしふぶきし男(おのこ)われど
あまよかきるかふ。野鶏(きじ)や山(やま)鳥のこゑ。又蔦(つた)もみぢ
大きくそゝ黒し。高(たか)く飛(とび)て人の家(いへ)の巣を作るも
又色多し。中にも白鷺(しらさぎ)いふそてのふりをふれぞ。柱(はしら)よひて
家(いへ)つきおろすをそゝぐ。ふ柱をこひをそ。ゑ戔(せん)ふせどそて板(いた)のもた
垣(かき)をまもる。富(とめ)るものハ柱(はしら)のかをとて銅(あかね)まてつゝ心共島移り
ゐつゝふり。友(とも)鳧(かも)ハ石垣(いはのかきそ石(いし)ぐきをつくりたるそ多(おほ)くとかげいぬくひ
流(ながれ)のそろんでそろあまりをそへまりり。ぐひのうんを
やうる。ゆゑんすれぞ盃(さかづき)の中へ虫をいるる。国地(くにち)より
ゆきたる者(もの)ぞれ。そつまたの角(つの)ありて全身(みうち)かゆきたる
ず。又ゑやーいふ虫をて人をさす。さゝしあるそ不審(ふしん)なる。
さゝふ虫を焚(たく)あをりまで戸障子(としやうじ)ふれ皆(みな)かびる
衣類(いるい)納度(なんど)おど田(た)びやゑ。此島田国(しまだのくに)そて五穀(ごこく)
そのれども。一日(ひと)雨(あめ)ふれおそや洞水(ほらみづ)をおまたて島(しま)我
おろふ事あまそ。仏もそれかまる鬼人(おにびと)おをこの
あるしいふ。三国(みくに)いふを海中の毒気(どくき)ありとそ。礼(れい)も
きつまいも。いもやまもいものそゝぐひそべて七年にあまて
笑(わら)ふかれても根(ね)の砌(みぎり)をこぎやをを多く仏(ほとけ)る享保(きやうほ)中さつま

国立国会図書館　タイトル『七島日記』 請求記号 863-1
ガラス使用

いもれるのをひろひ行てよるも笑ふに多くなりて今も
島人のうたえ残まゝなる
御恵乃いしもたゝそかつけおきぬもおろかにて
うたえ作。さて又女の髪をゝりて長きハ六尺三すぢ
あるをみる。又形容をくべて若し。まゝするりとふもの四
寸にをたゝとそえゆ。女おそろしみめよし。八丈島い
ねへの。女護の島なりしいつふ。今よ生まる女多く
もぞ。されも国地ふ遠まゆくまゝ風俗ハ大よ変るにて
戸のおもむきを見つゝてもそれよりふみをく。国
地乃人ハそのこゝろおぶきち見にくしひとぞ
思ふるふ。さて江戸の風俗を見るに女のほんとうく
そゆくなるもそうおもこゞおのづからうつくしぞ。国はてるもの国地の人
日本を載のいねへの風俗ハやまとうたの
名言の如き美しき眼中ハかるやふふえ。島の人
おろかに賀朴ハいつゝかざる事をしらず。国の
人ハ見まゝおゝえりまゝ
日本を載のいねへの風俗ハやまとうたの
名言の如き美しき眼中ハかるやふふえ。島の人
おろかに賀朴ハいつゝかざる事をしらず。国の
人ハ見まゝおゝえりまゝ
うゝおやゝいへばかゝゝうちかゝふけるやうんぬ
やんそゝぞ。おさおさをゝふ母のひざ。ねゝ
めのとゝやんぞれもゝゝいえ作ゝそゝひし。

国立国会図書館　タイトル『七島日記』 請求記号 863-1
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『七島日記』　請求記号 863-1
ガラス使用

きる女はまぢらそていろもちさいえとをきる常ハ國
地のめさ。えろきいそろひぢおし
ごき事なり狩おりをうたひやそひく
やそろ舞さまかそろをよてそろる事そこに
又牛ふ角あはせさせて勝負をころる事そこに
多のあそびなり。牛のふんぐしをかし又日ごとに捨を
牛をそやしおひふべきやうをおしへ。此あそび我をふけたる
なりよふ。國地ふてき。ひぎ。をのうしろ山
かはざれごろくよはをおもきにたるをえらびてしきるなり。山
島あそび。草のう我かひそ。ねるをもあるへぢ牛多ふ
なるおをてたるうりかるが。肥ふそろりてかつう。國の牛ふ
まさ礼を牛ハそろくのあるくものくろひ。ふ島の
牛のかろる事。國の馬よりハ八丈の富士乃
繋ふ牛山くふそて。野牛おほし。
つやくなり。かひくしのやせつれをるを。牛山そめてバやく
肥ふそろくふ。又野牛をとりてかひ牛そろて國地の野
ろくふちがひ。ふそろりおそろくやもそれバ人をそこなふ
かろく容易ハそりほそろ。ふをそんとをまふくし
山のさくに堅牛四圍ホ毛をあくふ四圍よりあれ山のまわりにさくをかうを
そてふれをかけるそのろふにそんをを細のびる。牛のそくて
ひろのふるやうふこらえそるゆくへ
えき切るあ。大勢まて牛山をとりまさ。そんと思ふ

牛をとらへ、見めうまさにおひまさりてそれのあるべき
よりもそのめしたる牛ゟふたつ大勢行をわけ
おふ牛はさくをくゞるとそおぼえてそのしゝ其牛
さこもおそろしくあばれまはりてそれの綱をえきしめくべき
いきほひもなれど人のちからにはむかふへくもあらず。
長きつゝをはけゝるゟかめしを見るとおれまい
さまでゝもきいさゝしるがめしを遠くまきて
る事をやむをえずしてそれのつゝを
やしふ引つけゝゟ堀をえけばめしおのゝくつゝ
つゝとあゆみまるのまゝて牛ゟよつふきて数日我
へぬまを飼牛となるぞ又えもつの奇事をしたに

あいせんしてめしこをとりかへしそ又島人女をとり
てもおそろしあくのぶ又おろす事ふせぞちひさう
つゝみたる包そおろす女そのんなそうんと思へそれをおさむ
きゝかきしるせまゝそれとるんぢ事ゟちのくへ入
おき木のふるまゝに似くゝ又そうをそゆる小女ゟくべの
ひろい所のゟにそ女護の島へ男ゟつれそそうをを
かぞくゝ出ゝ男のそまゝゟそくにつまふ
えもやらんぢ風俗の珍まるお事
十五日十八日おなゝ事かを
十七日そゟもれくはさつゝりふ又島ゟ西みあまろ

一里ばかりにて船焼小島とて方一里の島あり。朝明神乃社
あり。此島へゆくなり。大社のごとくなるべき社ありぬ。
ゆるすべき日よりおそくなりたるゆゑ、
ふねもやをあげ帆をあげてのりつれども
えゆき島をうしろに門をおりて
あまりて岸よりの事なり。心文島のおそろしよ
山汐といふものありて時々に流れ来る。
汐の勢のはやきことうのごとし。矢のごとし。
船おやうもなく小山汐出来りて船をおもふ
つかふをおもふごとくまもりて山汐ゆきあひぬやうにて
たてからうじて小島よりかくまでおくりぬ

なごりをおしみつゝもがて日ぐれ
いかゞとおもふほど島人多くまねきて
のまいあそびなどにあやうくて
ふつゞくそんとする時そ。
そつかあるりさま船引
斯までたる多のまゐ練かな
つる日はまた花みて。お月さま
といふ。此島八面も峻嶮山
みちなくそばだちたるいた風乃うへふぐら
をまとをかけわたしてみちをたゞ磯辺ふ
船のおまいおかなり。日ぐれてのぞみを

えきしあげるやうにわりてさ
左右ふそうつまで。やうくに登るに島人乃
をとこそ。重き荷おそうひをうけ
らそつむもたいふもそれぞれ
ましもまた此間ふそつあれも
きの男ふたりまそ。いそ
きて

木
をつけて雨水をそ貯て
食をそのふ日を経て雨ふらんぞ祈るかよ。又奇
なりわを運ぶされば夏もゆきなどする事絶
なきべしまお地そいふそれぞ嶋を切て家を作て住
はきあもしも。ま三歩ふ過るふなく。棚田ふじゆる
めくそ。牛をまべきそうろふれが人の力のそ
農業をつくむふもみも
れの寒国幸ふ又島
いそべそ珊瑚よえそまふ
きばふ底ふんごやあんと
つもふうんちん
十八日
十九日
ふみそれまの流人それ。
えたおねとやせ裏い色をめて。此世乃

国立国会図書館　タイトル『七島日記』　請求記号 863-1
ガラス使用

えぐるも云えぬばかりにて。其さま
なりさえれども下さまれものかいてだに
るぬ人もる又世のおぼええんでたく附めきたりし
人も有。又一山一寺をたりたる法師もそ。又富有ふ
びとなりてその屋をめぐぬえ
今は島の人ふいやしめ。れ鹹草に
かぎて。れ是重罪をおくるもの
御免のまえて一度國小歸る事もやそんのをを
来てかえてなつえ。かる屋をまつ
ら治がおやまちぞや皆月もとむ
さすも。其ればぐいちのびてもそあん先祖
親族の名をけうそ其罪ふ島の
廿日ろふよりれぞ。つきそ
そ。暁ようつげ来る五月八日
このぼそのたようれぞ等人
ぐあるそすして俄よぼろ
ろそ帆をあんそろそ夜
ふそするふ稀ありぞ風夜を
國地のあ川ろえ
廿一日ろふも方人のをおえそ
ろよ呼ぬそやむ仲をおふやう
ぬへふ和おろ事かれ

国立国会図書館　タイトル『七島日記』 請求記号 863-1
ガラス使用

廿三日末吉(すゑよし)村に又五郎といふ者あり。九十歳あまりに
なりぬるが男子弐人ありて兄を吉三郎弟を又七といふ
又五郎ハいたくおいかゞまりて老耄(らうもう)して。朝昼(あさひる)をもわかで。いつの
ねぶりにのみありたるさまなれバ吉三郎あき銭をもうけつゝかへき
を此ころまで朝夕(あさゆふ)の事をふれ。又五郎ハ人のまゝに為るが
今ハゆつかつしたまひしと思ふばかりなるハいやあはれに老耄(らうもう)し
たる父のかほをまもらせそへやすらひなぐさめ孝養し
たり。島のうちにて末吉村ハことに山深き所なれバ薪(たきぎ)を
とり来るをかりそめのわざとして。又五郎ハいつもさら
にほひても只(たゞ)ひたすらに畑をつくりてすごし。むかしハ
田をつくり兄弟ともに山に入て薪(たきぎ)をとりきたるされども

薪をば又山へもちゆきて兄弟のものゝかはりに売る
てゆけといふ又あるハ耕しつゝのちいかにおきいで
山へゆかんといふ事なく。なるにそれをいかにもいらで兄弟
つとめてらつきぬるほどかはりに毛父の心をそむく事
なし兄弟かはるがはる夜もいねず家内十人あまりなるが
父の用ハ兄弟のみして。また人にゆだねる事なかりしぞ
又三根村に喜八(きはち)といふ者あり。田もそこばくもちたるのみかさ
なきまゝなる百姓なれど。よりどころもなしきが只喜八
のむすめあや名をかよといふ 名寸をのちに喜八とよめる それにむこをとりて銭
よりてまかでふけやするが喜八ハかんにそえてむこ事なくて
むてかさきに難渋(なんじふ)しけりかよて小人にやとはれて曲辰

業をつとめあるものくれを次て物
そのかりにあしたさ又いもの類をそ
一日の食ふたつぬを先父ふすめる
くふぜやいれのきたる家そくふの
おもひのまていくいでもちて帰る
いもぜのまゝ又やいもをかくまで
考業たる感もおすやたり
ごくつの産かぬもの考業やきこも
おろくい急やくなるがよくもつあ

廿五日
廿六日
八丈島より巳午れる三十里ばかりに青島
いくもたくそえ給る此ごろ人がる考
おそやけふやこそでをみ来をおつりぬ。うふ
考るる。國やおもそやくきん。島の人よ此考る
あそくれ

国立国会図書館　タイトル『七島日記』 請求記号 863-1
ガラス使用

島ぞなりたまふる。今よ
もの〻もまろべわ〻つ〻そ
そもそもて。つくふこまてをもそ
御免を蒙りて。ろくまいて
又もゆきもろが。八丈多ふ才
敷風ふあい〻洋中におろ
おつ〻つくんして。農員敷あるごつ〻もと
八人ありて。こそ〻四月れ未よ舟を
あ〻つ〻いかをなりたる。毎
そもやそりやをたる。そもや
ぬるの我そる。あをごまろふへゆくまそれ
三〻よが。日をかさまて漂洋
やふれでも必ず名をなそ
多る日を命日そて。お祀あそ
神佛の加護やあまあんや
ようつま。ろれより江戸へ出
御恵をかふむまて三宅島へ
帆をあげ。ふつまたす。父母妻ま
兄弟ようれ國より帰りや又八夢ふてそたぬや
ふど。よそ〻いあふそやえ。さ
多て八丈島よ屬したまごも。みち
つそ事いそ〻。されぞ年新ら八

多くあつまる事にておそろしくおもふ島にいたりおりぐさまでのぞみしにそまんとねがふ所にたりぬるうれしさは男は先祖のあら我まつるかなりとをうけぎ女おもはぬもいとたのもしくてぞ見えける。

廿七日又こぎいでぬべき船をおろさんとて傾よ所の後漕そやむ

廿八日 十九日 雨はいやたちてぞとどまりぬ

八月朔日

二日くもりてはれもせでこぎいでぬべきものつむ

船も高人の舟もそこにおろしてのぞみまでぞ。そこへ六十人余りの八重根の舟小出てこぎまもりぬ。其親族朋友人も多くつどひて船を出さんとむつまじらひて。男ひとりふたり女のそはぬぞめざましくて遠きもろのまことに我かげ。まさき日傘をさす小女ハかかえうさふつゝり花つけるかふるそのおもむき国地のまつわ見るらんそかふきをいとえくがたしもをかしくて船よりおりぬ。ゆきつゞきたるもの又ふぐそ国地ふとゞ

国立国会図書館　タイトル『七島日記』 請求記号 863-1
ガラス使用

そでまくりてり老のおらつまらにおもひやらるゝ
ゆくものも扇る我こもちてともすゝみ
又もるもれ、野の巌石のさゝやかなるへ
をえてそゞろちれぞ。ものいひかけ
をへ帆をおろすへそ舟も扇もをあげさま
ねく岸ふ。今。そなもりものぬく。神をこゝろにふさ
さけぶもことまりなるれぞおまたものかた
るれひとみぞともよ月ぬ
八月もや十四日ふるまくわ
まちいの月をみむうく。ふおうきこゝろむさしのをも里ぬ。つがもま

人もえそゝぬ団のうちわひなる
大空の月をえまもむさし野
ふんもゝもうえやまもも
死ろくてえんいしをの月れるあいまを
そゝぬこのえにいあたらぬ人月は
心をかやまてひあいぬ
十五日くもまて月ゆえを
十六日
十七日今よまうえにふまいてゆきあるしてぬ
そろきふ鳥の画眉鳥ろもてこゝろ
今ふそふよのまきうにみるいふぬそろのかな

おもふおや
十八日よりおなじ事にて廿三日にぞまたり
しらの大風ふきて家多くふきやぶり大木を
おきをつぶしたふれあふ大風えもせのうちに
をさまびたびおき事をなん。そ我
他ふさ。大風を清しますをむねとする国にこれ
かやふきなるがゆゑ木が竹うそかるがゆゑ
せきれず。軒端を風のふきいるつきて訂
にくも釘のたてにくきそぞ。宗福寺
の本堂ふきいそぎ造もんども。のまにおはる
釿ふちひぞやねのうらへふきいるをおろ祝て軒を

えてそのへ家のうちをそうじをくる事おね
のつゝ高く国地のうるかりて見ゆ
廿四日三宅へ行てうんするを祝ひ
い月も晦日小なり
九月朔日初茸狩ふ多し。きのこ
ありけるに。国地そだちめづらしきものよう
たるが。そのうけうちまで。多
ふれを見てそよりも得ありもれ籠
ありをそのへ人ゝ見て。見た大毒
見我ふものをるちやう番なり
なりく。そのるふ。

国立国会図書館　タイトル『七島日記』 請求記号 863-1
ガラス使用

宗のや祢又木の椙うれあるまでに希の
つまざるもいをもるんふ。ふ
事ふ。ふれをさぬ流人國や
おもいくひくき希あるものをそ
ぬる高木よのうまこそをいをれねよう
つまある。かそして一事もる引ぎ希つまういさめ
正氣まるてそだめてかえそ
きてをまる事思ひもうじ閑人うつよのき本
おのおるものをのおせそその繩をつけそれ
うえくうおそもまかうだてなくそさもあじ。
きいつくえの事なりそ。宗福寺ふあまる流人この

毒よあるうて。狂氣のごくありたるをろのまて君
やうくんぬそ。如何のきにのおるふれぞそ。ふ
て一間ふるあへおくしめそくまをそぞて
衣をあるふ。ゆうにうて。正氣まやまりつくんと一間の
戸をはけあるふ。ま人なふ。こいうええまろやふ
まそ。おけいぐあるまやくえるにふ
なふ。あやきまれつぎまあり。ふ
くつまあへ静そのおるまる事かおいそ。いふおもてあえて
うにあまをまる事かおいそ。いふおもてあえて
あまるかまうとふ。つまもおろまにあへきにふ
ねど。ほくてうくえのぼりたまそえばそれ今や

きよめなどしてかへの衣をきたる事也。露ばかりもまどろまで
も、いかりのつきいはそろりなる哉。夢のやうに覚えて
なりしふしさては此つぎいよりの衣をきたるやうにも此細き
網よりの綱りたる事なれとてはしこ我かけてやうやうに
おろしおろしかなりぬれるあやしききぬをも
あらた新

二月四日のあさ鷹の行来るにふゆきて見ればちかへり
をとめのしるある翼つれて高く飛つゞげにけりて見えずもと
なりうかうかこえて来るなどまたゆふさるくの海を飛
来るなし。かくさもしかるべし。鳥は只南をさしてとぶなれば
いづこをさして来るにもあらじ。鳥島をさして見えてきたる

なるべし。鷗かもいり来る鶴も声をさらにて
なりたるとぞ

三日

四日あさつきしてふなかのふ島の人おちつきて角力
をとる我つえるにいへるあまの五穀をぬるもかれやせ
て骨出たるそあかりのへえて手足もかたくなれ
るもかはつて国のつける下泣なれどもをかしき角力を
とりどもるに島のすまふ土俵のかたちなど
かべきなるやうな。籾のうへ国のそれまさりけるに。又米俵を
船よりあげ。又船へつむまでの骨おりがそのほを
すまふやすんどぞ見ふりなる。俵をもつて国の人まで

つくり。漆食して人を労す事おきしなぶ。おのづから筋骨つよくなりぬべし。かもつまきなおかしきさまなるべし。その中乃さまざまの金銀銭の多き事をつとめかしこき農の事をつとめ。かしこき人の名をあらはす事をつとめ。衣食ふかふるのみなり。

おもむきまさに楽をゆるべし。

おのづから仙境の

栗の酒 団地の名酒もまたおなじ。

つくり。国ぶり。國そのものなほ

つくりおもちんふかきをたのしむ。又乞食の

猟草の食となる。茱根の多きをくらひよあるべし五穀乃

そばきびはえて。生命のつぎ

まさうそあくまでおもむきそ

むりそんなやおもしろ猟なよ。たけくの

やまのかもそかまたけも

七日まおろにて九月もや

九くみそに國の方へてまで十月は今ゆ芸

なるべんふむりより舩をおろさず来年の四月

るまでて国北ふ帰ますかぶまこの

うへた二月七月此島ふあるまでも

廿一日 廿二日

廿三日 ふね神湊(かみなと)をこぎ出(いで)てよりふやそ吹(ふき)つきもてゆく間(あひだ)船乃帰(ふねのかへ)るさ

ふくそ小國の文もてゆくべき國のつかひ

思(おも)ひ〳〵ふるいもらく〳〵かへるまゝ

おてそ。も今まで八丈島よりおいそやぎ。こゝろゆく

ばかりのふくとて一筆(ひとふで)文もなし

しきぞまきさる

廿四日てうけい靜(しづか)小風(こかぜ)うけ出(いだ)しぶね

寅時(とらのとき)ばかりこぎ出(いで)ぬ。

午の時(うまのとき)ばかりに夫(それ)の間(あひだ)繋(つな)ぎて

廿五日ふくて雨もやまねばふねを揚(あげ)ぬ。

の人〳〵おく〳〵まるがそ里(さと)だちに行(ゆき)て

これ〳〵小舟(こぶね)もちのまて船(ふね)をかへる

者(もの)も五六人のこりてそ。

かまるが三宅島までゆく事(こと)

海(うみ)そこ〳〵ありけれ。

つかまし舟(ふね)小舟(こぶね)ぬきふねのまぐし船(ふね)のあてけるふやふやいつふり今(いま)

国立国会図書館　タイトル『七島日記』　請求記号 863-1
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『七島日記』　請求記号 863-1　　ガラス使用

岩のうへおて。神ふるが。中にそらをかく。船の耳をそそるしぬへ飛いる。めをさまして。そもて海よりてあんさそ三宅島へ已の時までふそうべきが汐むつまき波ふそもて申のはるる比つきおりけり廿七日うらにあまそそや十月ふなりたる朝日こそもれて五月七日小柳崎をもまきてく。ふるえて日本をえる。新島しの間まに伊豆國をそまめくにえゆるそのうそをそ富士山えゆる。そもあやまりまづりにちいさそ島ありそのくまき筆にもおよばず又きぐふへきおもひ

そも六月ふそうえる。父島ふ小島のくまそれりきるにそをえるふうにそ島ふ高くそをにえて。日本をえる。年ぐりをへて。日本を帰つるえ比してえ乳人よるそ父うさにえ多りにたへおて。そのおハ稲嵐のふる。八丈島うもきふ新しふの竹をぱ尺へ出をえ二日ふ月ふてえ六日ふなりぬ。小島ふ薬師堂そふまでそえる。境内えく椎楠ふて大木えびるあしい巌ふ五萬多くこけ

むしてそのほかものありたち。左右の
扉に仁王の画そ。佛前のらんまに龍の画そ。
英一蝶の筆なり。一蝶此島へながされ
やうにぞ。それを思ひやるうちもいとあはれ
なり。直のたゝずまひ。
善導大師。圓光大師の尊像を真画そいと尊し。
又神像をあまたかけり。わが国にては
釈迦。阿弥陀。観音。又浄土宗の寺
なれば。
七福神の画そ。又弁才天の神像そ。
おゝ一松勢の画そ。
なりとぞ。

七日 晴。つゝまやより。本のあまみ一面につゞきし也。
そのうしろを見やれば。島の産物
七福神の画そ。又弁才天の神像そ。
おゝ一松勢の画そ。
なりとぞ。

七日 晴。つゝまやより。本のあまみ一面につゞきし也。
そのうしろを見やれば。島の産物
をうりしそのその花さきつゞけし。
おもしろ。菖蒲。やまゆり。
そめぶ。松葉蘭といへるいとめづらしき
るいまわりてそ。風俗風俗国地ほかの事なり
男は船かぢをとりて。女の容儀は丈高て
おとこまさり。三宅島おなじて五里許ふ沖

黄楊木の名産なり。國中小男小女いと多く
島より出るなりとぞ。人のすむあたりは
伐りもきつくしたり。又生茂て。書くべき
ほどにて戸をさしてあるもいと多くなん。
なん。此島へもわたることなくて大抵は
船をもちゆかぶ。その故あることにて
わたることなし。此島小為朝山といふ
林あり。たしかうつる七地よりは木伐出べき
せんとするに。為朝の霊をおそれ
たることそ。その人おほくなりしかば
過るとき。鎌のやうなるものをさしあげ
ふさぎ載の木の葉ふるうごとくにても地をれはなし
肥をもとめ島をもとめしとて。仰
るそうれおそ。今ふたたび伐べきに極まれども。
おそれおのくといふ。さらば楽して神の
ちからさや幸んとて
もそやある神のたゝりをつもの伐うごとく人の
ためともの山をもいひもあらじ。
てもあらじ人くも無ねやうことなるも
廿五日にもなりたり
廿六日そらはれよりは船おそれて。
新島へわたるに。神津島のかたより

国立国会図書館　タイトル『七島日記』 請求記号 863-1
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『七島日記』　請求記号 863-1
ガラス使用

し薪(たきゞ)をとり。夜(よる)をつくまで。ねぶりもせで。おる。まゝ
もしはまれ。まれにはありて。それ衣裳(いしやう)をきるぞ
緞子(たゞこ)綫を以て。其の中を思ひ居るに。ちまちまき女
たばこを好(このむ)ものなるに。たくもいふことやまで。おゝ
さびさりて。女首(くび)にちりまで。頭(たゞ)につまき。三十貫
目ばかりをつかりにいだきて来る。肩にかくべきわ
られつかりにてもつ。田はなし畠も少なし。砂たる所
豆麦(まめむぎ)などの雑(まじ)はしのべ。さつまいもを多く作り。味(あぢ)ひ
まるによし。ぼたによきぐひにあしべきさまにて。不
しろ石臼(いしうす)にてひきて粉にして。久しく貯(たくは)ふ。傍(むしろ)
おいまし。なんどそれにて子。甘くあるそてよし。されども

砂地なき村なれのつく。砂を又さとつくりより甘蔗(かんしよ)
を作りて茎(くけ)を取りて甘(あま)み多(おほ)し。今は砂糖(さとう)を作き事ず
ともなく出来(でき)して。江戸へ出して。又野雞(きじ)山雞(やまどり)多し
庭前(ぶい)には草木あまたあり。又水仙(すいせん)寒菊(かんぎく)多くみちあせ
かまへなるにおのづからの草(くさ)の露(つゆ)乃
ふる事なくいはねども花もさかえて年事せい。
菊(きく)をつくりて。秋の黄菊(きぎく)のめでたくて香気(かうき)あり
て味(あぢはひ)よし。又椿(つばき)をおほくうゑて。実の油(あぶら)をとる。今(いま)
花さかりなるが。園地(くにち)の春のつぎまより。これも是(これ)
おほ大島へ行(ゆく)人もあるに。日より十一月ころまで
十二月二日にあたるね

三日ときそれいろ〳〵いろ〳〵ほそ
かきの日和かりとて急ぎ舟をもろ
るがほゆきまろ〳〵も。先伊豆國へ
大島へけふまでやまとそづく
利そもちろくなりてほそろぬぬぐ
かろしてろおひゆくにおのづろ風や
ろろそ。あ〳〵ふきけりてだ〳〵
ろろ危檣へろ〳〵つきて舟ゆ
舟危檣へろ〳〵つきて舟ゆ
うまゆくよ舟もあそぐ
ものをそりいあてそれをお津
事かやとろふよ。舟もがかもろ
鯨うかろいて。あそぶのかが。今既よろ
そろ汐へ桜子をろろそろまで。
おそれて遠くおけさろ鯨ふのそ
ろろくるのかおそろしきのがぎ
さてその舟よ害あ。津ふらはろ
けりなるを。ろ〳〵びあそび〳〵。鯨
あそも。ろきころにおろふこそろて。
ろんどくするろ舟もろいよ流
等多て大島よちろれぞいかふ
ろろんとねぶふ。ろべもひのろ
のそおうれゆきて。大ろのるあろ

ガラス使用

もとれるくおきいそぐ東へとのこぐれゆくも
運のつきそうまやと思ふよ又申酉の風ぞそろ順風
にそあるもまもぱらそろて出房の国へよろんや
帆をとりよせきてのかをやてのまも矛まて船を
くつえんこまそろ事三度あまりつゐて帆をおろして一そろえき
をがもとりつなぎてうけてをおろして
あげそろをおろまそろやまそろぬをそろにひきお
ろそのへ船まもあってさくく事かまひそろまも
帆をきけすて風をろろ船をろろそぞかろ
あやふきてるかまけるが神仏の加護あまけるおや
やぐて風吹そろひぬ風ふまそろくそろさしもあまりに風
そげーまそろて帆をあろる事もかぶふはやと
ろものかろ三合より内の帆ろろおもひのまにそろらすろた。
大島の東の沖を元二十里もあらんと思ひしに
まに相乃浦賀ちくよる申酉のさよを吹風ちる
かぎりも寅卯の方へふきはろをとり。成実のろくさして走るそ
うろかろふきしろんとろるぐめ荒波も山のぬ
ろまろる才残りくまおくろくしきいふそろもろ汁
まぐも。手を空て汐も流もあ
思へぞ。そのろふろ風人ぬてろもて
ろりれ舟のろまをあやふきまで

うのよをうつすべき。されば船のみろ
申の時ばかりなり。こゝにやどり定めつ。えうりをも
ちて。大島へわたりぬれども。寒中れば海あらふれ
てそゝる止め。柳むらさきの帰るさよりつき。等身を
おろしつゝ。船のへさきを引かへして帰るなり。
湯水ぎたのんどをうつし。二日漂泊つゝ
そゝりおろして起居もおぼつかなし。船ゆきて
まじらひすれども。日をへ月残がさまして洋中まぢ
ほとりて命のつゞまるべき。又歌も中も船をゆきかふあを

その海とそおそろしき。憶しきるかな。なでうふ人
も。あゝ。先ごろおしてう診よりふたゝれようへの水絵
さらなるべきも。舟人のつゝしまれぬるそもく
りつゝものゝ四つ足におろのなる人ゝあい
ん又そゝれ海のおもてあぎしめまで。船そやきき
元のくおもしろがぎの陸はよりも。おろろきる
けめてそゝぬろつのゝ其事ふりてほて
うのゝそゝをゝへうべ。ふ船の形
おどよゝたゝもゝれさうえあゝとそ思る

国立国会図書館　タイトル『七島日記』 請求記号 863-1　ガラス使用

八丈島の言葉

○アイといふを○おもんといふべきを○おもとといふ
○うくといふ
○ていしかのるを○大なることをでいけといふ○小なることを祢けといふ○つのを○つきといふ
ぐていそふ
○三四十葉のやを○そこもおぬなどいふ○チンテイといふ
○伝とするをのやなどいふことを○おとろきそうなるをボツウといふ
○仁とするをアダンセインテといふ○そろくとなでふるを○ふらにくといふ
○をうさるなどいふことを○祢ることをそばうさるなどいふ○気かもめるなどいふことを○きめいるといふ
○をやくくといふことを○まことにといふ○すれくといふ
○まぶよといふ
○だらといふを○かちつくうるを○孫六といふ
○ひつつうといふ
○たいもといふを○女のまんを○男のまんを○大仮のまんをのつとうといふ
○おでるといふ
此外おもいろくそつまじきものいろ〳〵ありて。国地へ帰るものいろ〳〵国地の言葉ふたり

863
1

子供の名告り

○男子ハ、七男 弐郎 三郎 四郎 五郎 六郎 七郎 八郎 九郎 十郎

○女子ハ 弐 三 四 五 六 七 なをよびて、おか、てご、くす、おいろ、まつ、そよ、けし、

○あそれが子もおなじうれ父の名をかる

○元服して権兵衛。権之丞。

○いろいろのなをつく

尾上屋の系図

国立国会図書館　　タイトル『七島日記』　請求記号 863-1

ガラス使用